鉄の暴風と学徒隊

ー沖縄戦は何をもたらしたのか？

〈沖縄戦の概略〉

第二次世界大戦末期の 1945 年の 4 月、沖縄に米軍が上陸し、日本軍との間で熾烈な地上戦が展開された。戦ったのは兵士ばかりではない。沖縄という辺境にあって人員不足に悩んだ日本軍は、住民を巻き込み、当時沖縄にあった 21 の中等学校から生徒たちを動員したのである。

女子は 15 歳から 19 歳までで、主に陸軍病院などで看護活動に当たり、男子は 14 歳から 19 歳までで、上級生は「鉄血勤皇隊」に、下級生は「逓信隊」に配属された。卒業を控えた 3 月、戦争の足音が聞こえてきた沖縄で生徒たちは戦場へ借出されていった。

「ひめゆり学徒隊」は沖縄師範学校女子部と、沖縄県立第一高等女学校から動員された 222 名の生徒と 18 名の教師たちのことをいう。このうち 136 名は戦場で命を落とし、帰らぬ人となった。

日本軍、米軍だけでなく、本土と沖縄という隔たりが生んだ差別、さらに朝鮮や韓国から連れてこられた人々が押し込められた「ガマ」の中で何が起こったのかは、事前学習で学んだとおりである。

米軍から見れば、沖縄は本土攻撃の足掛かりという重要な地点であった。あいだに横たわる太平洋を直接越えて攻撃ができない米軍は、フィリピンや沖縄諸島を伝うようにして本土に近づく戦略を採った。これを「アイスバーグ作戦」という。

日本軍は首里城の地下に司令部を置き、沖縄守備軍を配置して、本土決戦までの時間稼ぎとして米軍を釘づけにする持久戦を選んだ。

沖縄戦を特徴づける要素の 1 つが、このときの米軍の攻撃である。3 ヶ月に及ぶ艦砲射撃や空爆・砲撃によって 20 万人が亡くなり、沖縄は地形が変わってしまうほどの被害を受けた。これは後に「鉄の暴風」と呼ばれることになる。

日本軍は南部に撤退しながら地下壕に潜って抵抗を続けたが、6 月下旬、沖縄守備軍が壊滅し、牛島中将司令官も摩文仁（まぶに）の丘で自決を余儀なくされた。

司令官の自決後、解散命令が出されたが、これがさらなる悲劇を生んだ。米軍が攻撃を続けて迫りくる中で、住民たちは壕から出て、自分の判断で動かざるを得なくなったのである。

解散命令以前の「ひめゆり学徒隊」の犠牲者は 19 人だけだが、解散後は 100 名あまりが命を落としている。

ガマや御嶽（うたき）に潜む人々に対して、米軍は火炎放射器やガス弾を用い、手榴弾を使って入口を塞ぐなどの攻撃を行った。戦争は人を変えてしまう。

修学旅行１日目は沖縄戦の痕跡を旅する。今回の４日間で訪れる場所に、戦場にならなかった場所はない。沖縄戦ではこの土地に住んでいた４人に１人が命を落としている。誰もが戦争遺族である。厳粛な気持ちで臨んでもらいたい。

★ ひめゆり平和祈念資料館　※最初に、クラス毎に献花を行います。

ここは実際にひめゆり学徒隊の人々が潜み、死んでいった壕「伊原第三外科壕」のすぐ隣に建てられた資料館である。現在、壕の中には入れないが、その入口を見ることができる。

資料館には、ひめゆり学徒隊 240 名の遺影や遺品、生存者の証言集、実物大の壕の模型などが展示され、戦争の悲惨さをうかがい知ることができる。

戦争体験が風化しつつある今日、戦争が何をもたらすのか、平和の大切さを教えてくれる場になっている。

★ 摩文仁の丘 / 平和の礎 / 平和祈念資料館

沖縄戦最後の激戦地であり、日本軍の司令官、牛島中将が自決を図ったのがこの「摩文仁の丘」である。沖縄戦は民間人や県外から連れてこられた軍人の犠牲者が多く、今なお遺骨が見つかっていない人、戸籍などが焼けてしまって名前の分からない人も多い。

摩文仁の丘には現在、県外からの戦没者の墓碑が建ち並んでいる。

そして、終戦 50 周年を記念して造られた「平和の礎（いしじ）」には、この戦争で亡くなったすべての人の名前が１人ひとり刻まれている。軍人や民間人、そして国籍に関係なく刻まれている点に、平和への想いが感じられる。

ここでは最初にこの２ヵ所を歩いて見学した後で「平和祈念資料館」に入り、沖縄戦について詳しいことを学ぶ。目の前の海はこの上なく美しいのだが、そこはかつて多くの人々が崖に追いつめられて飛び降りた場所である。60 年前、ここは確かに戦場だった。

〈難読氏名の由来〉

沖縄の人々はこれまでの 3 回、苗字を変えることを強制させられている。

1 回目は 17 世紀初めのとき。琉球王国は薩摩藩が送った 3000 人の兵士に制圧された。この後、「大和めきたる苗字」が禁止されたのである。本土を思わせるような名前を使うな、ということだ。これは一種の差別である。

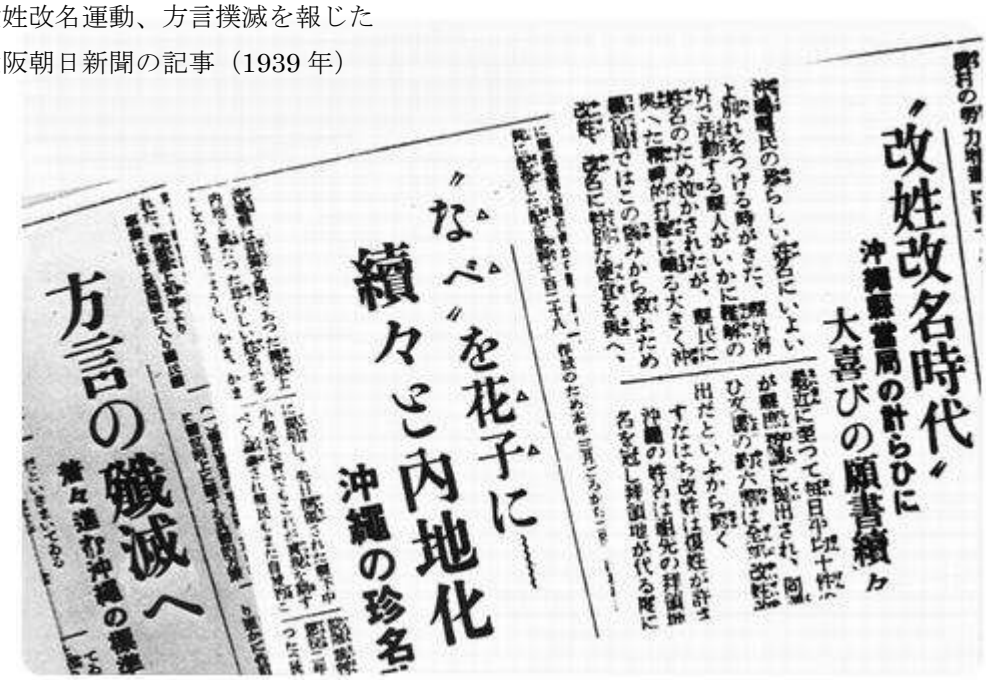
「前田」という苗字は本土でも広く使われているので、琉球では「真栄田」に、同じく「東」は「比嘉」などに変更させられた。

2 回目は廃藩置県のとき。琉球王国を廃止して沖縄県とし、琉球の「日本化」が進められる中で、今度は明治政府によって「大和めきたる苗字」が押し付けられたのである。

とくに「正しい」発音が求められ、「金城（かなぐすく）」は「きんじょう」に、「上原（うぃーばる）」は「うえはら」にといった具合に変更させられた。

3 回目は第二次世界大戦後のこと。地上戦によって戸籍が焼かれてしまったために、新しい苗字の登録を余儀なくされたのだ。血縁関係にある人々で相談して「比嘉」を「青山」や「吉村」にしたり、「島袋」を単に「島」にしたりといった大規模な改変が加えられて今日に至っている。

沖縄に難読氏名や難読地名が多いのは土地の方言や発音によるものもあるが、度重なる侵略の残した傷跡という側面も持つことは否定できない。「明日から名前を変えろ」と強制されたら君はどう思うだろうか？

自分たちと異なる文化を「ユニークな特徴」と考えて受け入れるか、「異端」と捉えて排斥したり改変を迫ったりするか、そこには大きなちがいがある。戦争を起こすか起こさないか、その本質は案外こんな所にあるのではないだろうか。

改姓改名運動、方言撲滅を報じた
大阪朝日新聞の記事（1939 年）